

文化学・学際・パラダイム

——文化学科の課題と目標——

森 園 節 生

今回、編集委員より、文化学科開設以来のスタッフの一員として、文化学科開設にいたる経過等について、寄稿して貰いたいとの依頼を受けた。ところが、私は学科開設準備にあたっては、単なる一脇役にしかすぎず、その経過についても十分なる知識、ましてその記録・資料等を、今は持ち合わせていない。それ故に、今回は先づ始めに、開設にあたっての心覚え、もしくは心象的見解を簡単に述べ、その後文化学科の一員として、文化学科を巡る諸問題についての私見（つまりドクサ）を断片的に書き連ね、責を果たすことにしたい。それにしても、現役の学生諸君のレポート同様、一夜づけの書きなぐりで、推敲の時間のないまま、原稿提出の羽目に落ち込んだが、読者諸君にとって、なんらかの知的刺激になれば、幸いである。

I

周知のごとく、文化学科は一九七四年度に本学に増設された。私なりの記憶と理解によれば、新学科開設準備の動きは、本学開

設後八年目にあたる一九七二年度から、本学開設十年目を見越して開始された。この新学科増設への出発は、当時三学科・学生総数約二千名の大学規模の本学を、四学科・学生総数約二千六百名の規模に引上げたいという、設置者たる法人の経営的発想から始まった。その主旨が、そのまま大学側にもたらされ、爾来新学科の内容、名称、スタッフの人选等の実質的検討が行われた。検討すべき問題はいろいろあったが、新学科への期待の根拠になったのは、以下の条件であった。第一には、既存の三学科とのバランスをとりながら、人文諸学の中から、できるだけ新鮮にして魅力ある学科であるべきこと。第二には、出来るならば、当時六〇年代から、澎湃として高まりつつあった、新しい知の動向にかかわる最もアップ・トゥ・デイトな学科であること。この二条件を基本線にして、新学科の内容・名称が問題にされ、人間関係学科、人間学科、比較文化学科等の名称が粗上り、最終的には、当初より本命であった文化学科に決定された。

正直のところ、今日から振り返って見ても、開設準備、たとえばカリキュラム細部の検討等についてなどは、未成熟なままの、見切り発車の部分があり、十全ではなかったと思う。そのため、初

期の学生諸君には、多少の迷惑をかけたと思う。しかし、見切り発車にせよ、発車したことは、後に判明したのだが、大いに意味があったことは確かである。というのは、もしあの時点で、発車が出来なく、準備が一年でも遅れていれば、その後のオイル・ショックによる建築費の急騰等の経済状況の逼迫のため、おそらく開設は不可能になったことだろう、と考えられる。とも角、文学科開設のタイミングは、まさにラッキーであった。

II

現行の本学『学生便覧』冒頭にある「沿革」の文章の中に、「学園の創立九〇周年にあたる昭和四〇年（一九六五）には、埼玉県新座市に女子大学を設置し文学部をおいた。この時、国文学科・美学美術史学科の二学科をもって開学した。そのうち、昭和四二年（一九六七）に英文学科、同四九年（一九七四）には文化学科を増設した。ここに哲学（美学美術史学科）・史学（文化学科）・文学（国文学科・英文学科）を支柱とする文学部が完成を見たのである。」とある。ここに引用された文章の登場は一九八〇年度版からであり、この文章の中の、特に「史学（文化学科）」という部分は、文化学科の認識についての重大な誤りを含んでいる。したがって、当時の学科連絡委員より当局に対して、記事訂正の申入れが行なわれたが、何故か、一九八一年度版、さらに一九八二年度版と、後も引続き記載されたまま、今日にいたっている。（なお序に、細部をとり上げれば、一九八二年度版の引用以外の記事に「大学設置以来十六年の試行」とあるがこれは明らかに

「一七」年の誤りであり、同じく要訂正部分である。）

では、先の引用文について、文化学科の立場から、誤りとする理由を、以下にあげておこう。

まず第一に、日本では文学部（実は文学部という学部名自体が日本独特で、諸外国の大学にはなじみのない区分名であるそうだが）内部の区分用語として、哲・史・文という三つのカテゴリーが、各大学において、明治以来今日にいたるまで、慣例的・便宜的に使用されている事実は一応認めはするが、近頃では段々使われなくなつて来ているし、もともとこの区分は、厳密にいえば学問的根拠があるわけではない。ところで、文化学科とは、かかる便宜的な哲・史・文という区分の次元とは、異なる地平に成立する学科である。仮に、この区分をそのまま使うならば、文化学科とは、哲・史・文、何れのカテゴリーにも属さない、言わば哲・史・文全体にまたがる総合学科ということになる。更に、もう一度この哲・史・文の三分法を使うとすると、先の引用文における他学科のことながら、次の訂正も必要であろう。「哲学（美学美術史学科）」という記事は、当然「哲学・史学（美学美術史学科）」とならねばならない。

第二に、「史学（文化学科）」という認識ほど、文化学科に対する認識不足を表明しているものはない。周知のように、われわれの文化学科は、文化学原論、文化史、思想史、人類学の四グループから構成されている。その中の二つのグループである、思想史および文化史の領域は、たしかに文字通り、史とうたっている。問題はあがるが、今は一歩ゆずって最広義の史学に入れてもよからう。しかし、他の二つのグループを構成する、文化学原論および

人類学のカバーする領域については、何としても史学という領域の中に納めるのは無理である。文化学原論とは、その立脚する立場によって自ら異なるが、一応、文化哲学もしくは、将来確立される科学としての文化学 (culturalogy) の原理論に相当する。したがって、当然、史学とは異なる学問領域を設定するものである。さらにもう一つの人類学は自然人類学と文化人類学・民俗学から構成されるが、一方の自然人類学は、名前の通り、自然科学が優先する領域であり、また一方の文化人類学・民俗学は、歴史的、言いかえれば通時的 (diachronic) レベルよりは、共時的 (synchronic) レベル、より適切には汎時的 (panchronic) レベルが優先する学問であると思う。要するに、二つの人類学とも、史学でカバーするわけにはいかない。

かつて、ディルタイの「精神科学」的世界 (今日の社会・人文科学) が、新カント学派において「歴史科学」(Windelband) と呼ばれ、あるいは「文化科学」、より正確には「歴史的文化科学」(Rickert) と、総称されていた時点ならいざしらず、現在われわれの文化学諸語を史学でわりきるのは、一つのアナクロニズムであり、歴史主義の限界を弁えぬ人の考えと、いつて良からう。第三の理由は、前二項の原理的論点と異なり、事実問題に属する。つまり、文化学科のカリキュラムの中で、一九八一年度から「史学概論」はかつての必修科目から、選択必修科目に改正されているという事実がある。もし、文化学科が史学科であるとするならば、この改正は全く不合理となる。逆に言って、文化学科全体は史学に入り切れないという認識があるからこそ、必修科目から史学概論が外され、文化史の各コースを選択する者のみに、部

分的に必修科目とされたわけだ。したがって、この項だけの事実問題からしても、少なくとも八一年版の文章は、不当な記事であり、訂正されるべきであった筈である。

以上三つの論点から見ると、史学Ⅱ文化学科という認識の誤りは、明らかであり、一刻も早く、『学生便覧』という大学作成のマニュアルから追放されなければならない。

実は、文化学諸語の学問的アプローチの共通の特徴の一つは、既成学問 (discipline) の領域・垣根を越える「学際的 (inter-disciplinary, または multi-disciplinary, cross-disciplinary という) アプローチにあると言って良からう。

III

歴史を振返れば、凡そ時代を代表するような偉大な学問は、もともと昔から、単なる一つの学問の個別領域内には止ってはいなかった。近代から現代への社会思想の流れを見渡しただけでも、先駆者となればきりが無いが、アダム・スミス、ヘーゲル、マルクス等の巨人たちの、それぞれの学問は、明かに総合的であり、決して単一の学問領域内に踞踏するものではなかった。まして、今世紀に入ると、市民社会の矛盾がいつせいに吹き上がり、今までにない新しき学問的課題に押しまくられ、しかも科学自身の側においては、それに対応するどころか、科学内部の細分化の弱点が露呈しはじめてきた。そのため、学問の分野においては、その打開策の一つとして、広範囲な視点からする、学問全体の再編成の動きが表われてきた。

ところで、右の動きに平行して、文化人類学、哲学的人間学、社会学等を尖兵として、二〇世紀の人文諸学問は、文化・社会・人間等の多義的にして、しかもトータルな概念を、学問的関心の中心として、本格的にとり上げざるを得ない状況に立至ってきたやがて、四〇年代に入ると、このようなトータルな概念追求のために必要な、新らしき学問形態の制度的再検討の動きも具体化されてきた。それは、昔ながらの伝統的慣習的な知識の分業化、専門化(タコソボ化)を乗り越えて、さまざまな学問領域の知の総動員・交流を試みる動きとなつて、具体化された。

まず、以上の動きの出発点となつたのは、四〇年代のアメリカにおける文化人類学者R・リントンの動きであつた。リントンは、ファッスムの脅威に代表される「世界危機」を予感し、「人間科学」(The Science of Man)の名の下に、文化人類学・社会心理学・社会学等の隣接科学のそれぞれの方法及び蓄積を総合しなければならぬという積極的な提唱を行った。かかる気運を背景として、専門の固定的な、学問の垣根をこえた「学際的」研究の具体的実現が促進された。これがアメリカに由来する「学際的アプローチ」の出発であつた。先ず、ハーバート大学では、四六年に、社会学・人類学・臨床心理学等を統合した「社会関係学部」(Department of Social Relations)が発足し、それに関連して、有名な「社会関係研究所」(Laboratory of Social Relations)が設立された。これに呼応して、イェール大学では、例の人類文化の総合的包括的インデックスで有名な「マードック・ファイル」(H. R. A. F.) (Human Relations Area Files)の母体となつた「人間関係研究所」(Institute of Human Relations)も設立された。

以上のような、四〇年代アメリカに由来する「学際的アプローチ」が時間的には遅れたものの、戦後日本において、とくに六〇年代において、急にクローズアップされ、各大学における採用となつた。規模こそちがえ、われわれの文化学科の構想も、実は以上の路線に、そのまま繋がるものである。したがつて、われわれ文化学科の三グループそれぞれに所属する三コース、それに原論の一コースを合わせた、文化学科一〇コースはどれをとつて見ても、単なる一個のディシプリンでは賄えきれない、「学際的」なコースとなつてゐる。先述した総合科目としての文化学科とは、かかる知的路線に由来するものである。

IV

前項では、文化学科の一特徴としての「学際的」というポイントが強調されたが、現時点からすれば、これはしごく当然の成行きであつたといえる。現在の知的状況からすれば、今や「学際的」であることは、決して目新しいことではない。カリキュラムについて見ても、今日の諸大学においては、一般教育科目の中に、多くの総合科目としての講義が置かれているのを見ても、もはや「学際的」学問が常識となつた事情を物語つてゐる。

ところで、「学際的」とは、学問的アプローチの方法として、言わば単眼的(monocular)ではなく、複眼的(binocular)より正確には多眼的(polyocular)視点より、問題を考察するといふ、考えてみれば、きわめて単純な発想から由来したものであり、むしろ問題は、その先にこそある。多くのアプローチの視点を取る

ことより、むしろ、いかなるポイントと原理により、多眼のフォーカスを学問的統一にもたらすが、より重要である。しかも、厄介なことには、われわれにとって、文化という余りにも広く、かつ多義的にしてトータルな概念が、われわれの相手であるということだ。周知のように、二人の文化人類学者 (A. L. Kroeber & C. Kluckhohn) の研究によれば、文化には実に一六〇ほどの定義があるとされる。しかも、この多様な文化は、われわれ人間生活にとっては、抜き差しならぬ環境として、われわれを取りまいている。したがって、悪しき文化、誤れる文化を正す道すらも文化を通じてしか、変革の道はない、というアイロニーが存在する。われわれにとって、不可避免的にして、しかも同時に多様な、しかも仲々とりつく間もない相手、これが文化である。しかも、かかる文化への本格的な学問追求の歴史は浅く、むしろ始まったばかりである。

では、かかる状況の中にあつて、われわれの文化学科は、何をすべきであり、何を目指すべきなのであろうか。文化学科の課題とは、目標とは何であるのか。

私見によれば、以下にあげる二つのポイントが、第一義的な問題として、考えられる。

第一課題は、われわれにとって従来の文化人類学を乗り越えた、本格的な文化学 (culturology) の確立が急務である、ということだ。

先覚の種々の試みは別として、この意味での文化学は本格的には、まだ確立されていない。宗教・経済等の文化の部分の実証的探究、また未開民族・未開人という部分社会の探究に止らず、そ

れらを視野の中に包みながら、かつ文化の全体をカバーする、いわば人間文化一般の総合的把握を意図する、理論学としての文化学が樹立されなければならない。

たしかに、最近では国内外を問わず、文化への知的探究の試みは、まさに流行と言ってもよい程の、百家争鳴状態を現出している。思いっくだけ上げても、言語・記号・象徴・狂気・両義性・遊戯・周縁・交換・メタファー・パフォーマンス等々のキーワードが立ち並び、またグラマトロジー・ドラマトロジー・アルケオロジー・シンボリズム・コスモロジー等々の諸コードが乱立し、一々応接に暇もない有様である。

このような状況の中にあつて、一つ一つの思いつき、発想の面白さ、目新しさも乗り越えて、何らかの「文化の統一理論」への試みを提出することは、少くとも意味があることであり、むしろ、われわれにとって、一つの義務ともなるのではなからうか。

V

われわれにとって、第二の課題は、先の第一課題への挑戦と平行して行われねばならないことは勿論であるが、来るべき新しき「パラダイム」(paradigm, また disciplinary-matrix ともいう。後述) への創造の営みに、積極的に参加すべきである、ということである。

ここに、「来たるべきパラダイムへの創造の営みに参加」とは言つたものの、この言葉通りの実現の道は、いたって至難の道である。実現性・現実性という面からすれば、この道はきわめて重

荷を荷う道であり、むしろ、この言葉は、単なる理念的課題といふべきかもしれない。

なお、ここでパラダイムなる術語を使ったが、御存知のことと思うが、この術語は、科学史家 T. S. Kuhn が『科学革命の構造』(邦訳あり)という知的ベストセラーの中で展開したキーンセプトであり、簡単に言えば、「知的枠組」、もしくは「既成学問体系の知」、もっと俗に言えば、「教科書的知の体系」と言うべきものを意味している。クーンによれば、このパラダイムが、一旦、固定化されると、その学問は、一方では、ますますその学問内での研究が専門化され、緻密化されて行くもの、一方では、その学問がその枠外の新しい問題を解く力を失うと同時に、全く新しいものを生み出す能力をも失う結果になる。そして、このため、学問の枯渇化が生じ、学問は教科書の中に閉ち込まれ、せいでい学校の学問として、虚学になり果ててしまう。クーンは、かかる死んだ学問を「通常科学」(normal science) もしくは「パズル解きとしての通常科学」(normal science as puzzle-solving) と命名する。つまり、俗にいう「タコツボ内の学問」ということだ。ここから、新しい知の要求として、パラダイムの転換が求められる、それが成就すると「科学革命」が生まれる。

以上、大変荒っぽく、クーンの論旨を要約したが、さらにここで視野を広めて、最近の知的状況全般を通観して見ると、現代は、おそらく、デカルト以来の近代知のパラダイムが解体しつつある時期なのだということが予知される。つまり今日では、十年先か百年先か不明ながら、とも角新しいパラダイムの登場が間近という予感が、そのまま実感として感じられる。従来の近代知を形

成してきた、近代ヨーロッパ文明の軸となった「哲学知」と「科学知」の基本的パラダイムの全てが、その根底から批判され、解体され、それに代る新しいパラダイムの登場を迎えようとしている。今までの、「哲学知」、「科学知」とは全く異なった次元からの、しかも従来の学問的知としては、全く考えられなかった、新しい知として、たとえば、「魔術的知」、「狂氣的知」、「神話的知」、「野生的知」、「演劇的知」等の、新しいコンセプトが、文化探究の道の中から、続々と生まれつつある。今までは、人間が生ざる文化は、その中に人間自身が、どっぷりと漬っていたがために、かえって文化自身が分らなかつた。思いかえして、かかる文化に、やつと人々は気づき、あわててそれを把えようとした。しかし、それは初めて相手にする対象であつたがため、従来のパラダイムでは、どうしても把えることができない。そのために、全く新しいコンセプトを駆使し、何としても、文化を把えなおされねばならなくなつた。ここに、新しいパラダイムの転換は、おそらく文化への探究の道を通じてこそ、その姿を現わすのではなからうか、という大いなる期待が生まれる。近頃では、テキストという問題でも、従来のテキストとしての書物(要するに、これは既存の学問のこと)を脱皮して「文化テキスト」(ソビエト文化記号学)さらには、「テキストとしての文化」(山口昌男)という視野が開かれつつある。やや、ラフな言い方だが、かつての第一次科学革命にあっては、天文学・物理学を先陣とした、自然科学の地平から、パラダイムの転換がなされた。これに対し、今後に見し得る、第二次科学革命(?)の際には、おそらく、文化への探究の道を通じて、人文科学の地平より、新しいパラダイムが開拓され

るのではなからうか。

何分にも、ここに取り上げられたことは、未来に関わることなので、どうしても予言的、大風呂敷的発言が多くなり、そのため筆者自身甚だ恐縮している。ここで述べられた発言は、余りにも「大それた夢」だけを語ったことになるのであろうか。

VI

最後に、全く別の話題を、とりあげよう。

諸君たちの中には、文化学科開設以来、宗教史を担当して頂いている小池長之先生（東京学芸大学教授）の講義を、受講された方も多いことであろう。私ごとではあるが、彼と私は、同じ旧制高校での同期生であり、それ以来の友人である。高校では、彼と私は、クラスもちがいがい、彼は文化部、私は運動部というわけで、それほどの交友はなかった。しかし、若き日の彼は、活発にして、ユニークな個性の持ち主であり、しかも特技として、当時流行りだした腹話術や手品の名手でもあったので、学生間においては、颯爽たるエンターティナーとして、誰知らぬ者はなかった。その彼が社会に出て、大学教授になっても、そのユニークな人柄は、ほとんどかわらず、教育活動（名物教授としてのうわさを何度か、耳にした）は、勿論のこと、著作活動においても、はたまた山登り、ハイキング、水泳等多方面において、まことにエネルギーッシュであった。余談になるが、彼は最近まで、「東大を一番で卒業」と公言して、憚らなかつた。断っておくが、これは彼の若い頃からの、オチャメ的発言の一つである。というのは、東大文

学部宗教学科における、彼の卒業期の学生は、実はただ彼一人だけであったのだ。だから、彼はたしかに、トップではあったが、ビリでもあったわけだ。このように、彼はいつもエネルギーッシュであり、かつユーモアとオチャメを周りにふりまいていた。本学にも、毎週一回、私の研究室に元気な姿を現わし、相かわらずの談論風発の旋風を巻き起こしたかと思うと、さっと講義に向うのが、常であった。

その彼が、この春休み中に、突然の狭心症の発作に見舞れ、爾後三ヶ月の入院生活の止むなきにいたり、遂に今年度の「宗教史」の講義は、初めて一年休講となり、来年度の担当も、危ぶまれることに、なってしまった。

暑い七月のある日、彼から久しぶりの電話がかかり、退院の挨拶、さらに大学の講義のこと、病状のことなどの話題の後に、受話器を通じて、彼は私に、次のような話を伝えた。

入院後、まもなくのある日、親戚の方が、一つの千羽鶴を、彼の病床に届けた。それは、彼の家の門柱に、その前の日に結付けられてあったと、言うのだ。しかも、その千羽鶴には、「先生が御病氣とのこと、驚いています。一日も早く、健康を快復して下さい、……。跡見学園女子大学生」という趣旨が書かれた、一枚のカードがつけられてあった。彼が「その日は一日中、涙が出て仕方がなかった。」と、電話の向うで話す声も、いつしか打ちふるえていた。その話を聞いた私も、何か胸につき上げるものを、感じた。続けて彼は、「入院していて、こんなに嬉しかったことはなかった。しかし、大学と書いてあるだけなので、この贈り主を探して御礼を言うことはできない。」と。そして、機会があっ

たら、活字にしてもよいから、間接的にでも、是非、御礼の気持ちを伝えてもらいたい、との依頼を受けた。彼の友人として、この贈り主に対して、彼同様、出来れば、私も是非お会いして、御礼を申し上げたい。贈り主よ、名乗ってはくれまいか。

この話を聞いて、彼の入院という不幸があつたことながら、善い話を聞いたと思つた。また、外では、と角言われがちな女子大生の、真実の心情の表われに、接した思いで、その日一日は、こちらまで何か、心暖まつた思いに満たされた。彼の講義は、たしか共通選択科目なので、文化学科の学生のみが聴講しているわけではないので、何とも言えないが、私には何故か、この千羽鶴の主は、きっと文化学科の学生にちがいない、という、手前味噌的な予感がしてならない。いや、この主が文化学科の学生であるうが、他学科の学生であるうが、それはどうでも良い。その何れにしても、文化学科の人々に、報告したい話であることは、変りがない。

あえて、文化学科に話しを関連づけければ、次のことを、さらに

言わねばなるまい。

言うまでもなく、文化とは、最広義には、人為であり、つまり人間が中心であり、かつ主体である。しからば、かかる文化の探究を志す、いわば文化学徒にとつて、先の話の主のように、他人の不幸・弱み・傷みにも、優しさをもつて共感し得るといふ、深い人間への関心と愛情をもつたまなざしを持つことが、その学問的追求の裏付けになる、第一の主体的条件ではないだろうか。逆に言えば、凡そこの点に欠ける者が、人間・文化への追求を志すなどということは、僭越であり、烏滸がましい、と言つて良い。

この千羽鶴の話は、単に善い話という以上に、文化学徒自身にとつて、主体的条件の第一として、人間的優しさが不可欠であるという、当然と言えば当然のことを、改めて思い知らしてくれた話としても、私には忘れられない、素敵な話しに思えてならないのだが、諸君たちは、一体どのように受取ってくれるのだろうか。

(専任・西洋思想史)